

電柱から血が

仲 田 清

一九四四年（昭和十九年）春、ラジオから流れる大本営発表ニュースは、いつも日本軍が勝つたと伝えていた。その日本の名古屋の上空に、まさか敵だいほんえいの飛行機てきが飛んでくるとは思ってもみなかつた。

わたしが九歳、小学三年生の時のことである。「敵の飛行機が爆弾を落としていったそうだ」——そんなうわさが広まつた。そんなことはデマないかげん（うわさ）だろうと言つて、わたしたちは信じなかつた。

ところが、それから一週間ほどたつて、しばらく休んでみえた担任の先生が久しぶりに学校に出てみえた時のことである。先生いつになく元気がないな、変だなと思つていると、先生はうつむいたままなき出された。「先生の家が、この前の空襲で焼かれたのです。何もかも焼けてしまつたのです。」

そう言つて、その時のように話をしてくれた。でも、わたしには名古屋の町に敵の飛行機

が来たなんて、まだ信じられなかつた。

しかし、現実はそうではなかつた。それから日ましに空襲が多くなつてきた。学校で落ち着いて勉強することもできなくなつてきた。

一時間目は「家へ早く帰る練習」——先生が時計を見ていて、「ようい、ドン」の合図で教室を飛び出し、自分の家の玄関をさわつてまた教室までもどる。この間に何分かかったかを調べるのである。

また、ある時は、道路を歩いていて、空襲警報になつたらどうしたらよいのか勉強をした。まづ頭に防空ずきんをかぶり、地面の一番低い所に身をふせる。そして、手で顔をおおい、親指で耳の穴をおさえる。こんな勉強をくり返しきり返し行つた。

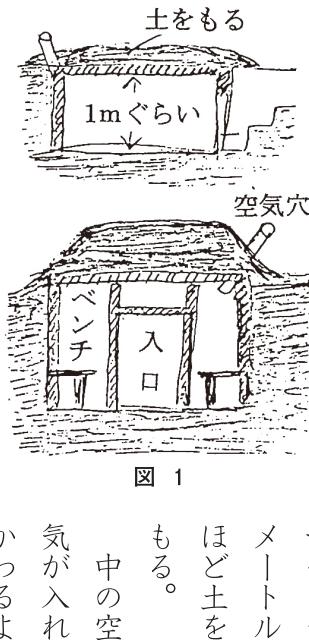
学校のほかでも、土曜日や日曜日になると町内で次のようなくん練をした。

消火くん練——親も子も老人もみんなバケツを持って集まり、用水池から一列にならんで水を手わたしで運び、電柱の高い所をめがけてかける。みんなしんけんになつて練習をした。

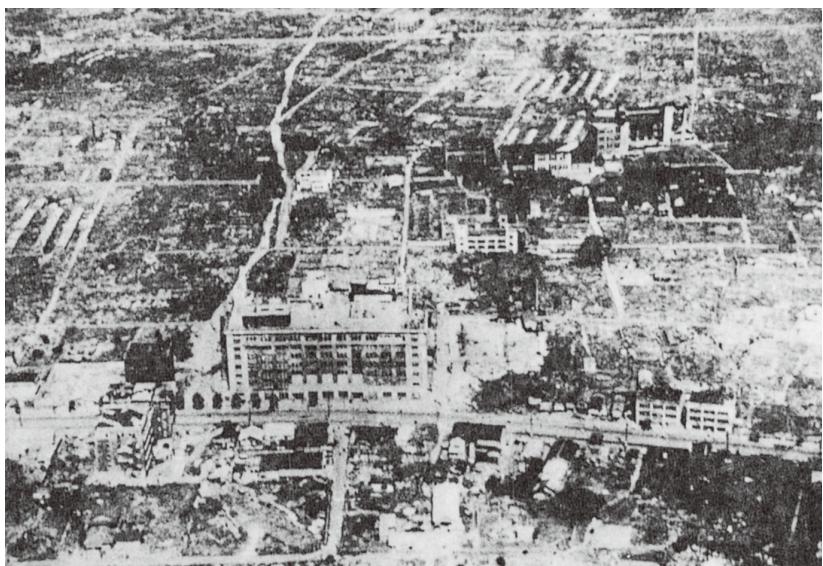
竹やりくん練——洗たくざおぐらいの太い竹の先をとがらせて竹やりを作る。そして、それをわら人形めがけてするどくつきさす練習である。もし敵が来たら、この竹やりでたたかおういうのである。

病人やおさない子どもをのぞいて、町内全員がおたがいに助け合つて空襲にそなえたのである。

また、自分の家のそばに防空壕を作り、空襲になつたら、そこへ逃げこむようにもした。わたしの家の防空壕(図1)は、家族九人の入れる大きさであつた。横は太い丸太を柱にして板かべを作り、上はトタンをかぶせてその上に三十七センチメートルほどの土をまるまる。中の中の空気が入れかわるよう



うにえんとつを立てた。
空襲がくりかえされ、名古屋駅付近から栄、今池いまいけと焼けあとが多くなつた。南や北の工場地帯も毎日のように空襲をうけ、大勢の人が死んだり家を焼かれたりしていった。



空襲で廃墟はいきょとなった名古屋中心区（南大津通り）
中央のたて物は松坂屋デパート 昭. 21. 8月

ある日、**警戒警報**^(けいかいけいほう)とともに急いで家に帰り、防空壕へかくれた。するとまもなく、敵の飛行機B29(図2)が南の空から飛んできた。五機…十機。来る、来る。二十機…三十機…。まつ青な秋の空に白銀に光るB29。白い飛行機雲を引いて私の家めがけて飛んで来る。実にくにくしい姿だ。次のしゅん間、黒い小さなゴマつぶのようなものが散った。それが一メートルもある爆弾だったのだ。父のいような声が走った。

「あぶないぞ!! ふせろ!!」

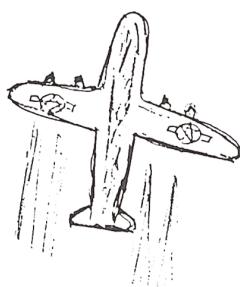


図 2

防空壕の入口で空を見ていたわたしは、次のしゅん間ころげこむよう奥に入り、うつぶせになつて防空ずきんの上から耳をおさえていた。ザーザーザー。爆弾の落ちてくる音が聞こえた。この時、わたしは、もうだめだと思つた。キイーン、キイーン。音がかわってきた。

父が、

「近いぞ!!」と言つたしゅん間、わたしの体はがたがたふるえた。土がザザーザザーと上から落ちてきた。ほんの一しゅんの出来事だった。

防空壕の入口の戸が開き、中が明るくなつて、わたしはわれに返つた。生きていた。家族みんな生きていた。自分の家もそのままあつた。ほつとしたが、足がくがくして歩けない。

「たいへんだ!! うちの家がないぞ!!

父のものすごい声で、防空壕から飛び出した。わたしの家から二百メートルぐらいはなれた所

にあつた五けん長屋が何ひとつ残つていない。

兄が、

「見てくる。」と言つてかけ出した。わたしも一目散について行つた。

行つて見て、わたしはがく然とした。二階建てのりっぱな家が五けんともかげも形もなくなつていて。あたりには直径十メートル、深さ五メートルぐらいの大きな穴がいくつもあいつている。道の向こうのりっぱな家も倉だけを残しあと形もない。電柱は半分にわれてたれさがつていて。よく見ると電柱から血が流れている。石がきからも血が。あちらでも、こちらでも、いたるところから流れている。何とそれは爆弾で飛び散った人間の肉がほうぼうに付いていて、そこから血が流れ出しているのだ。

戦争はおそろしい。二度とこんな体験はしたたくない。させたくない。

(名古屋市昭和区在住)

耳にひびくサイレンの音

福 知 林

「ザザーッ」「ヒュルヒュルヒュル」「ビシン、ビツシーン」と、ものすごい音が、せまい防空壕の中にひびきわたる。小石がたきの水のようにあたり一面にたたきつける。母の必死の顔。